

## Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

### 2. 令和7年度後期末授業評価アンケート調査結果

#### はじめに

令和7年度後期に開講された科目について、各学部・学科ごとに学生による授業評価の結果をまとめた。例年、実習・実験、ゼミ、集中講義などは分析の対象外としており、同一科目のクラス別開講の場合はクラス数でカウントしているため、分析の対象となったのは人間学部93科目、人間生活学部104科目であった。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う2項目、授業及び学修に関する11項目（評価基準は1～5点）の計13項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計11項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- |             |                                 |
|-------------|---------------------------------|
| 設問群①：「授業内容」 | 3項目の点数合計に対する1項目あたりの平均           |
| 設問群②：「授業方法」 | 5項目の点数合計に対する1項目あたりの平均           |
| 設問群③：「総合評価」 | 1項目の点数合計に対する1項目あたりの平均           |
| 設問④：「学修時間」  | 1項目（1h未満、2h未満、3h未満、4h未満、5h以上）の比 |
| 設問⑤：「学修行動」  | 1項目それぞれの平均                      |

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として9項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられる場合もあるが、今回は平均を利用した結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、過去の仁愛大学FD推進活動報告書を参照されたい。

#### 2.1 人間学部

##### （1）共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図1（心理学科10科目）、および図2（コミュニケーション学科10科目）にそれぞれ示した。図1に示された心理学科の学生の延べ人数は300名で、各学年それぞれ1年生＝188名、2年生＝80名、3年生＝17名、4年生＝15名であった。また、図2に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は292名で、各学年それぞれ1年＝137名、2年＝131名、3年＝16名、4年生＝8名であった。心理学科およびコミュニケーション学科の延べ人数は、昨年度よりも減少した。また、過年度と同様、該当の単位をそれまでの学年で既に修得可能なことから、両学科ともに3年生以上の受講数は少なかった。

心理学科では、授業内容に関する評価は昨年度と比較して1年生および2年生で低下し、3年生で上昇した。授業方法に関する評価は各学年ともおおむね横ばいであった。総合評価は、1年生で低下し、2年生で上昇した。コミュニケーション学科では、授業内容に関する評価は1年生および2年生で上昇した。授業方法に関する評価は全学年で昨年度とほぼ同水準であり、高い評価を維持していた。総合評価は、1年生で上昇し、2年生および3年生では昨年度とほぼ同様であった。

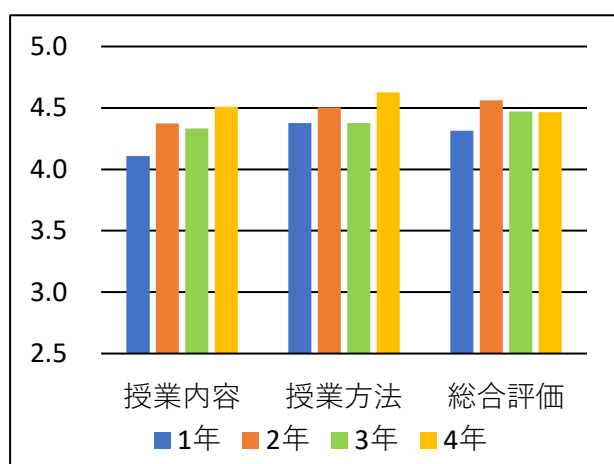


図1 心理学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数

1年=188名、2年=80名、3年生=17名、4年生=15名

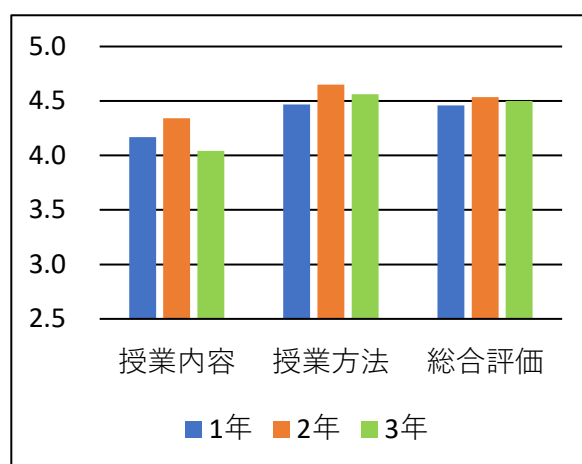


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数

1年=137名、2年=131名、3年生=16名

## (2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図3（心理学科10科目）、および図4（コミュニケーション学科9科目）にそれぞれ示した。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は136名で、各学年それぞれ1年=114名、2年=18名、3年=1名、4年生=3名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は107名で、各学年それぞれ1年=82名、2年=20名、3年生=3名、4年生=2名であった。心理学科の延べ人数は、昨年度よりも増加した一方で、コミュニケーション学科の延べ人数は、昨年度よりも減少した。昨年度は、3年生と4年生の人数が少なかったため、両学科とも1年生および2年生の分析しか行っていない。

心理学科では、授業内容に関する評価は昨年度と比較して1年生および2年生で微増した。授業方法に関する評価は、1年生で低下し、2年生で上昇した。総合評価は、両学年とも大きく上昇した。コミュニケーション学科では、授業内容および授業方法に関する評価は、1年生および2年生でいずれもおおむね横ばいであった。総合評価は、両学年で低下した。

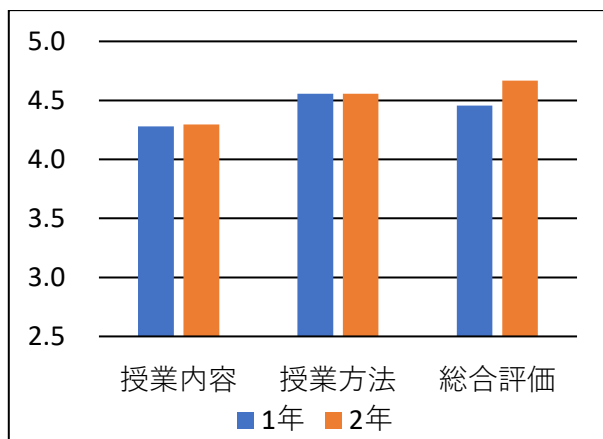


図3 心理学科の共通語科目に関する授業評価点  
延べ人数 1年=114名、2年=18名

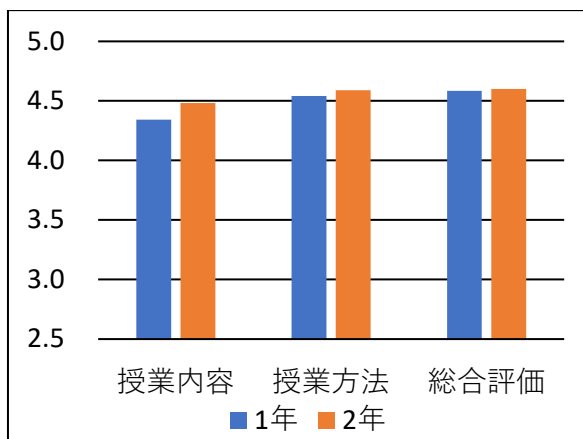


図4 コミュニケーション学科の共通語科目に関する授業評価点  
延べ人数 1年=82名、2年=20名

### (3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 22 科目、コミュニケーション学科 36 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 5（心理学科）、および図 6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図 5 に示された心理学科の学生の延べ人数は 844 名で、各学年それぞれ 1 年=327 名、2 年=302 名、3 年=189 名、4 年=26 名であった。また、図 6 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 746 名で、各学年それぞれ 1 年=351 名、2 年=263 名、3 年=115 名、4 年=17 名であった。心理学科およびコミュニケーション学科の延べ人数は昨年度よりも減少した。

心理学科では、授業内容に関する評価は昨年度と比較して、1 年生、3 年生および 4 年生でほぼ同様であり、2 年生で上昇した。授業方法に関する評価は、4 年生で低下し、1 年生、2 年生および 3 年生で上昇した。総合評価は、1 年生および 4 年生で低下し、2 年生および 3 年生で上昇した。コミュニケーション学科では、授業内容に関する評価は、1 年生、2 年生および 3 年生でほぼ同様であり、4 年生で大きく上昇した。授業方法に関する評価は、1 年生、3 年生および 4 年生でほぼ同様であり、2 年生で低下した。総合評価は、1 年生、2 年生および 3 年生でほぼ同様であり、4 年生で大きく上昇した。

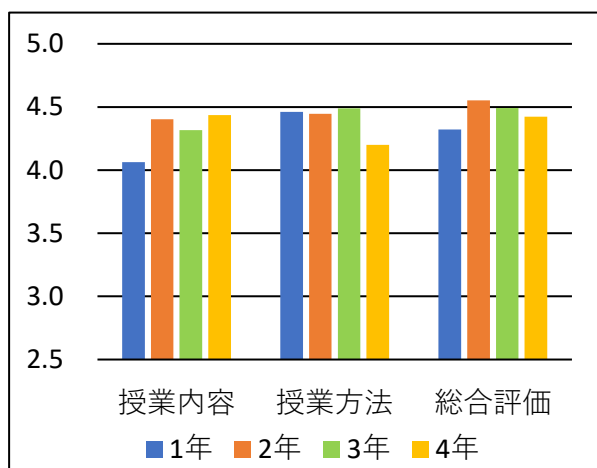


図5 心理学科の専門科目に関する授業評価点  
延べ人数  
1年=327名、2年=302名、3年=189名、4年=26名

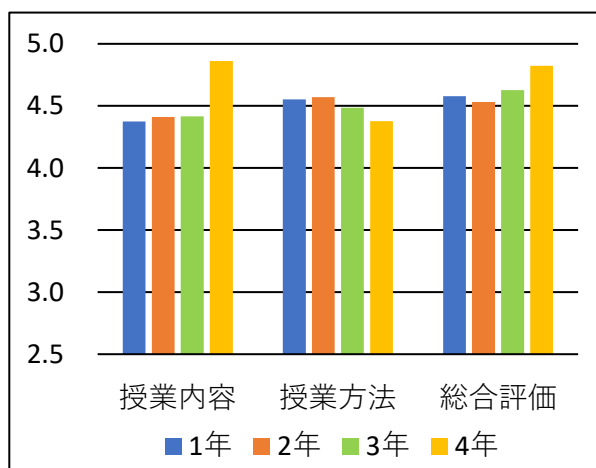


図6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点  
延べ人数  
1年=351名、2年=263名、3年=115名、4年=17名

#### (4) 学修時間と学修行動

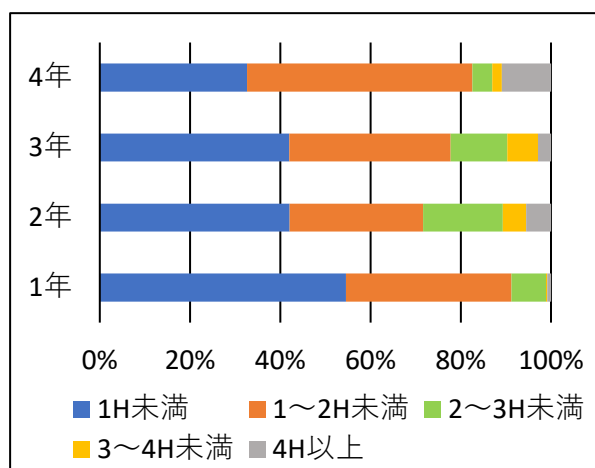


図7 心理学科の授業外での学修時間

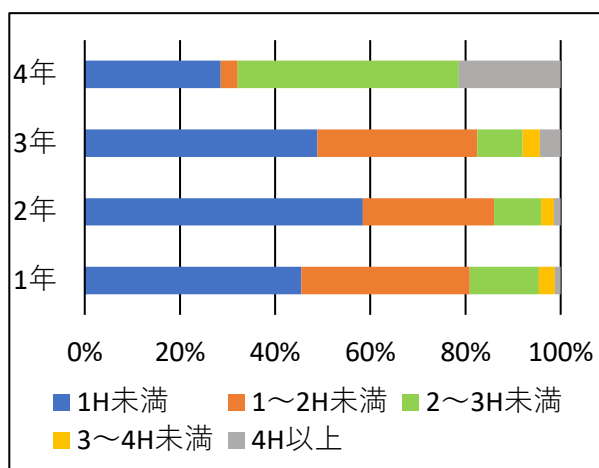


図8 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図7および図8に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、心理学科では昨年度と比較して、4年生で減少傾向がみられた一方、1年生、2年生および3年生では増加傾向がみられた。コミュニケーション学科では、全体として増加傾向がみられた。

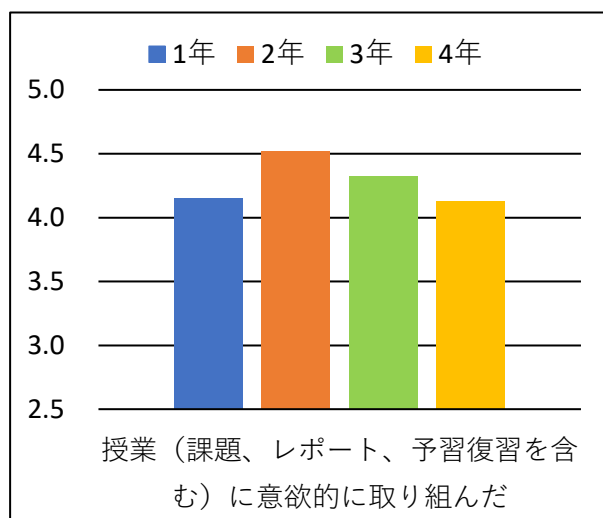


図9 心理学科の学修行動

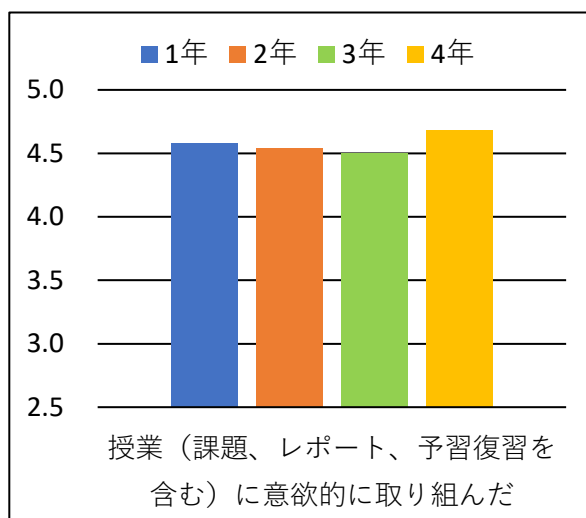


図10 コミュニケーション学科の学修行動

続いて、各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図9および図10に示した。心理学科では、昨年度と比較して全学年でおおむね横ばいであった。コミュニケーション学科では、全学年で増加傾向がみられた。

## （５）人間学部のまとめ

本年度後期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。昨年度後期と同様、概ね例年通りであった。多様な学生が在籍するなかで、今後も、各教員の創意工夫による授業の質の維持・向上が求められる。より良い授業を引き続き模索していくことが大切である。

（報告：禿寿）

## 2.2 人間生活学部

### (1) 共通教養科目

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において9科目から回答を得た（図1参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が80名、2年生が41名、3年生が4名、4年生が2名であった。項目別評価は1年生では「授業内容」がやや低かったが「授業方法」は4.41で最も高く、2年生では「総合評価」が高く4.5を超えていた。いずれの項目でも、2年生の評価が1年生の評価よりも顕著に高かった。

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において10科目から回答を得た（図2参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が61名、2年生が43名、3年生が1名、4年生が2名であった。1年生、2年生ともに「授業内容」がやや低かったが、いずれの項目でも学年差が小さく、すべて4.1を超えていた。

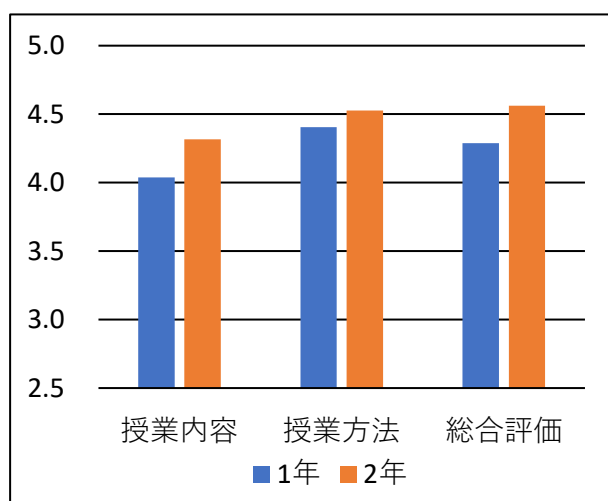


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点  
延べ人数 1年＝80名、2年＝41名

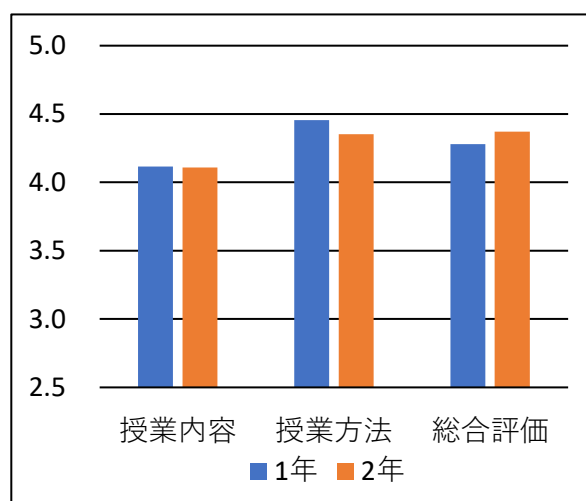


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点  
延べ人数 1年＝61名、2年＝43名

### (2) 共通語学科目

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において7科目から回答を得た（図3参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が86名、2年生が2名、3年生が0名、4年生が0名であった。

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において6科目から回答を得た（図4参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が60名、2年生が3名、3年生が1名、4年生が0名であった。

両学科とも「授業方法」が最も高く、「授業内容」が最も低く、類似した傾向であった。

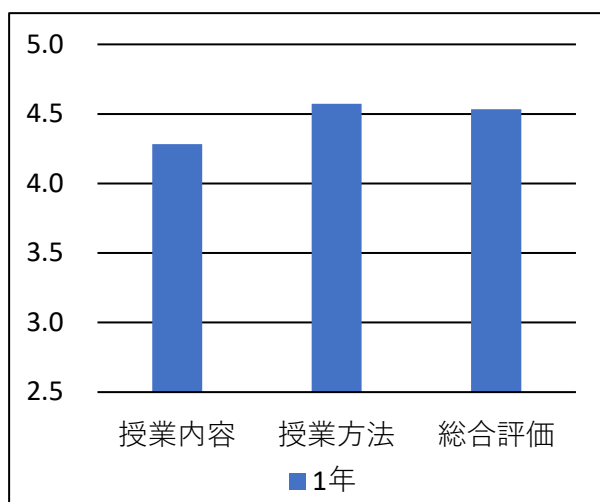


図3 健康栄養学科の共通語科目に関する授業評価点  
延べ人数 1年=86名

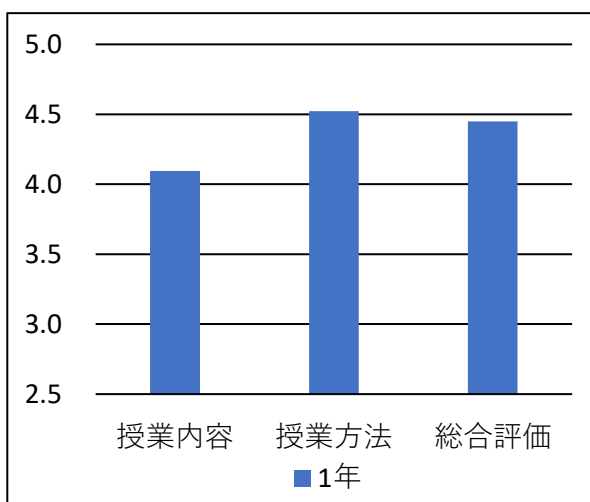


図4 子ども教育学科の共通語科目に関する授業評価点  
延べ人数 1年=60名

### (3) 専門科目

健康栄養学科学生が受講する専門科目において 30 科目から回答を得た（図 5 参照）。延べ回答人数は、1 年生が 303 名、2 年生が 352 名、3 年生が 159 名、4 年生が 28 名であった。1 年生の「授業内容」が最も低く、2 年生の「総合評価」が最も高かった。

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、37 科目から回答を得た（図 6 参照）。延べ回答人数は、1 年生が 289 名、2 年生が 318 名、3 年生が 355 名、4 年生が 59 名であった。いずれの項目も 3 年生が低い傾向にあり、2 年生が最も高かった。

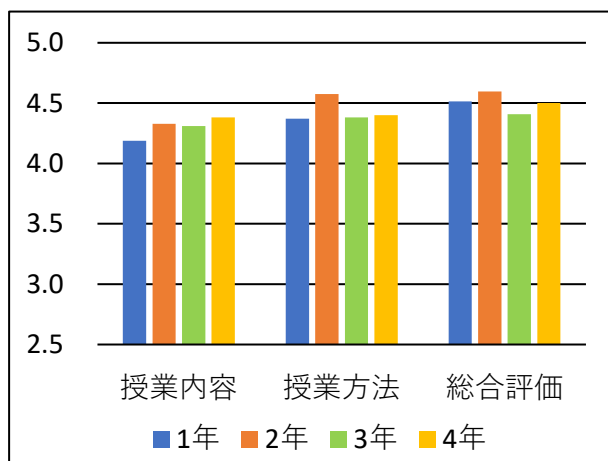


図5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点  
延べ人数  
1年=303名、2年=352名、3年=159名、4年=28名

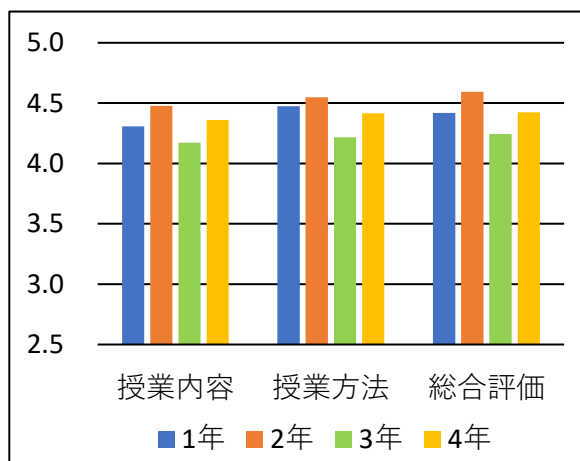


図6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点  
延べ人数  
1年=289名、2年=318名、3年=355名、4年=59名

#### (4) 学外での学修時間と学修行動

図7は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は1年生が469件、2年生が395件、3年生が164件、4年生が30件であった。1～3年生は学年が上がるにつれて学修時間が増える傾向があり、4年生の学修時間の分布は「1時間未満」「1～2時間未満」「2～3時間未満」の3区分に分布していた。

図8は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は、1年生が410件、2年生が366件、3年生が357件、4年生が61件であった。1・4年生の分布と2・3年生の分布がおおよそ同じになる傾向が見られた。

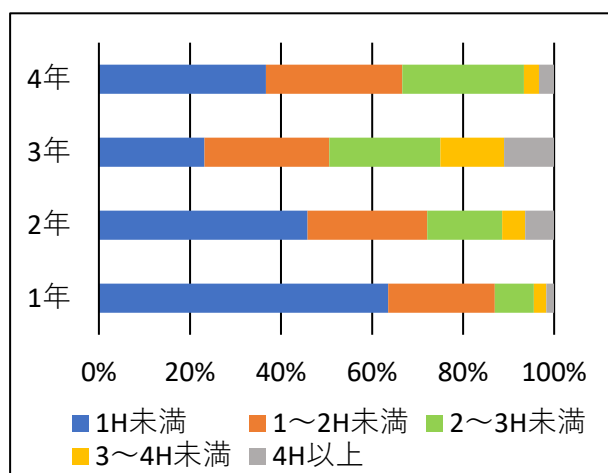


図7 健康栄養学科の授業外での学修時間

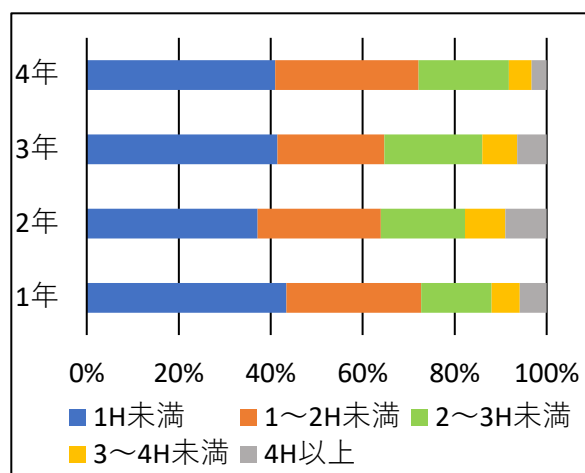


図8 子ども教育学科の授業外での学修時間

図9は、健康栄養学科での学修行動について学年別に比較したものである。学年が上がるにつれて数値が増える結果となった。図10は、子ども教育学科での学修行動について学年別に比較したものである。1年生では4.39、2・3年生では4.5を超え、4年生では4.30で最低値を示した。

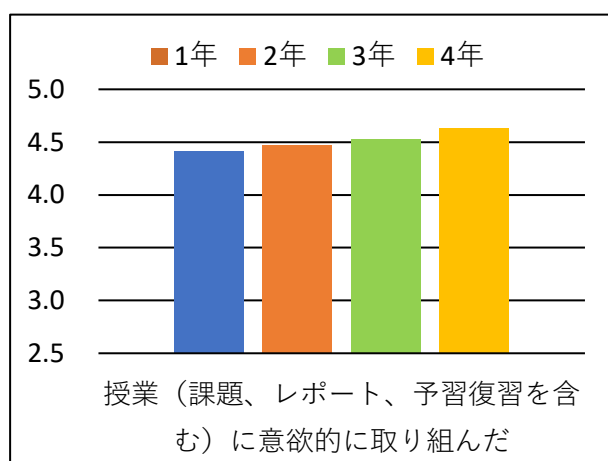


図9 健康栄養学科の学修行動

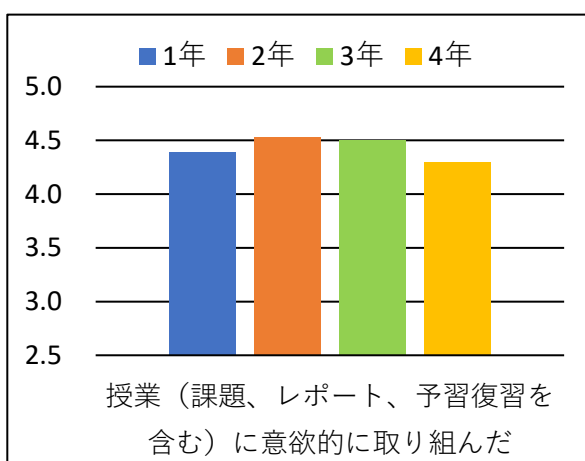


図10 子ども教育学科の学修行動

## （５）人間生活学部のまとめ

本年度後期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を概観した。評価や学修行動に関して、科目やカリキュラムの特性による影響も一定程度あるだろうが、学生（個人あるいは学年・クラス全体）の特性による影響も大きいと考えられる。そのような特性があるとしても、一定の学修時間の確保や意欲的な学修行動を目指すためには、学生の日常的な大学生活のあり方を改めて検討する必要がある。また、将来的に学生個人の特性が多様化していく可能性を考えると、集団の中で学生の個別性を重視した指導や教育は、今後、教員にとって大きな課題となる。

（報告：草桶勇人）

## Ⅱ 学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

### 3. 令和7年度 大学院授業評価アンケート調査結果

#### 3.2 後期末授業評価アンケート調査結果

##### はじめに

令和7年度後期に開講された科目の内、院生による授業評価が実施された7科目についてまとめた。実施内容・方法は学部と同様であった。得られた結果について、授業評価の各項目の平均得点および全体の平均得点に関して検討した。また、担当者が独自で個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較が不可能であるため、本報告書では扱わない。

##### (6) 講義科目と演習・実習科目の比較

大学院の授業において、公認心理師養成の要となる演習・実習科目は特に重要であり、院生に求められる内容が講義科目とは大きく異なると考えられる。そこで、授業形態ごとの比較を行った。

図1は授業形態ごと（講義科目と演習・実習科目）の評価点を示したものである。分類した講義科目数は6科目、演習・実習科目数は、1科目であった。講義科目も演習・実習科目も全般的に高い評価であり、講義科目は前年度とほぼ同じ評価点といえる。なお、例年、講義科目と比較して若干高い評価となる演習・実習科目において、今回は明らかに評価が低く、特に授業方法と全体の評価点が4.0を下回っていることに関しては、吟味する必要がある。

大学院の授業は授業数および受講生数が少なく、評価の変動については原因を捉え、理解度や成績評価との関係もふまえて、よりよい授業の展開が期待される。

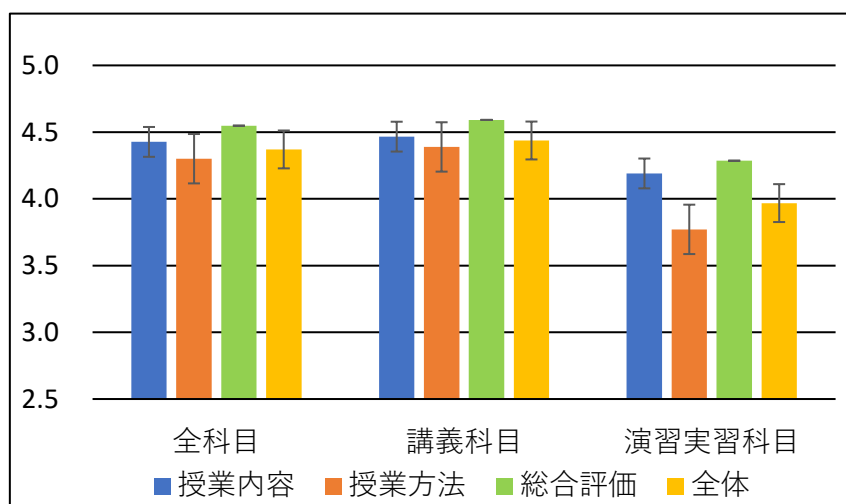


図1 各科目別の平均授業評価点（±SD）

それぞれの科目数は7、6、1科目

（報告：大森慈子）